

「関ヶ原」の勝敗はなぜ 「文禄・慶長の役」で 決まったのか

Kang Hibong
康熙奉

復讐と裏切りの
「関ヶ原」は
「文禄・慶長の役」
が引き金になった!

出兵せずに恩恵だけ受けた徳川家康
出兵時に多くの恨みを買った石田三成
両者の決定的な違いが「関ヶ原」を左右した

今まで
書かれなかった
真実が
ここにある!



「関ヶ原」の勝敗はなぜ「文禄・慶長の役」で決まったのか

康熙奉

星海社

375



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

復讐と裏切りの「関ヶ原」は

「文禄・慶長の役」が引き金になった

東海道本線に乗って岐阜駅から米原駅まで行くとき、楽しみの一つが関ヶ原駅を通ることである。

大垣駅を過ぎるとなぜかソワソワしてくるのだが、連なった山が迫ってくると、その眼前に関ヶ原の風景が見え始める。心が高揚する瞬間だ。

日本のほぼ中央で、天下の雌雄を決する史上最大の決戦が行われた……そうした歴史の重みをひしひしと感じられる場所が、私にとっては関ヶ原なのである。

時間があるときは関ヶ原駅でブラリと降りてみる。どんなに家並みが変わったとしても、山の形だけは1600年9月15日とまったく変わっていない。時間を超えた風景の佇まい

に、なんとも嬉しくなってくる。

そんな気持ちで歩いていると、自然と向かう先は笹尾山のふもとだ。ここに、西軍を率いた石田三成が陣を置いた。実際に目の前に広がる景観が圧巻だ。左右に伸びる関ヶ原とまわりの山並みを一望できる。

「なんと最良の場所に陣を置いたことか」

素直にそう思える。

しかも、西軍の諸大名は東軍を囲むように布陣していた。

対峙する形だけを見ると、西軍の圧勝であったかもしれない。それでも、物事は机上とおりには進まない。

戦国時代の合戦は、人間を動かす掌握術がモノを言った。その点で、石田三成は人の気持ち動かせなかったし、徳川家康は巧みに味方を引き入れる心理戦で一枚も二枚も上手であった。

それにしても、関ヶ原合戦というのは不思議な戦いだった。なぜなら、不倶戴天の敵同士が戦ったのではなく、豊臣恩顧の大名たちが東軍と西軍に分かれて争ったからだ。

東軍は徳川家康が総大将とはいえ、配下の多くは豊臣家に恩がある大名たちである。い

わば、徳川家康は豊臣家ゆかりの大名たちの力を借りて天下取りに動いている。彼の人間洞察を生かした戦術がそれを可能にしたのだが、哀れなのは利用された大名たちだ。豊臣秀吉亡き後、幼い秀頼を守って豊臣家に忠誠を誓ったはずなのに、徳川家康が仕掛けた工作によって石田三成こそが悪の政敵だと錯覚させられ、結果的に豊臣家そのものを滅ぼすことにつながってしまった。

しかも、東軍にくみした豊臣家ゆかりの大名たちは「用済み」とばかりに、その後何人も取り潰しの憂き目にあっている。

つまり、こういうことだ。豊臣家に多大な恩義を感じていながら、結局はその豊臣家に弓を引くことになり、なおかつ自分たちもやがて滅ぼされてしまう……考えれば考えるほど自虐的であった、と言わざるを得ない。

このように、関ヶ原合戦は豊臣家の内紛の果てに起きた



石田三成が陣を構えた笹尾山から見た関ヶ原の風景

戦いなのだが、その内紛の萌芽は、すでに文禄・慶長の役のときに生じていた。

言うまでもなく、文禄・慶長の役は大義もなく、諸大名にとつて避けたかった戦いであつた。しかも、西国の大名ばかりが動員されて、塗炭とたんの苦しみを味わつた。それなのに、恩賞はほとんどなかった。

戦国の世もまだ完全に終わっていない時代に、徒勞に終わった戦いでは不満が渦巻くのも当然のことである。

そのはけ口が石田三成への復讐だつた。彼は能吏として文禄・慶長の役の実務を仕切つたのだが、朝鮮半島で実際に戦つた大名たちからは極端に憎悪された。根深い怨みを晴らす復讐の場が関ヶ原であり、ここでは裏切りが横行した。

つまり、関ヶ原合戦の勝敗には、文禄・慶長の役で起こつた豊臣家臣団の内紛が決定的に影響していた。

歴史は、人間の感情が引き起こす因果応報で成り立っている。文禄・慶長の役から関ヶ原合戦に至る9年間は、その因果応報の象徴的な時代であつた。時系列に沿つて改めて振り返ることで、復讐と裏切りが勝敗を決定づけた背景が見えてくるに違いない。

目次

はじめに 復讐と裏切りの「関ヶ原」は「文禄・慶長の役」が引き金になった 3

序章 文禄の役は奇襲作戦から始まった 13

- 1 釜山に上陸した豊臣軍 14
- 2 反撃できない朝鮮王朝軍 17
- 3 怒濤のような快進撃 19
- 4 都からの撤退論議 23
- 5 北に向けて脱出した国王 27
- 6 朝鮮王朝軍はなぜ弱かったのか 32

第1章

豊臣軍の怒濤の進撃はどこまで続いたのか

35

1 板挟みになった対馬 36

2 来日した使節 39

3 待ち続けた返書 43

4 対立した正使と副使 47

5 豊臣軍の戦術 51

6 民衆の怒りが頂点に達した 56

7 李舜臣の天才的な海戦術 59

8 変わりゆく戦局 64

第2章

偽りの和平交渉は果たして成立したのか

67

1 明軍の敗退 68

第3章

再戦となった慶長の役は何をもたらしたのか

93

- 2 平壤からの退 71
- 3 碧蹄館と幸州山城の戦い 76
- 4 豊臣軍に有利な和議交渉 79
- 5 名護屋城での工作 85
- 6 和平が難しくなった 90

- 1 小西行長の密告 94
- 2 投獄された李舜臣 97
- 3 総力をふりしぼる豊臣軍 100
- 4 無謀に戦局を拡大できない 104
- 5 豊臣秀吉の死 108
- 6 李舜臣の最期 110

第4章

豊臣家臣団の分裂は何を引き起こしたか

115

1 諸大名の告発 116

2 石田三成と加藤清正の対立構造 119

3 激しい反目の行方 123

4 大名たちの分裂は必至 126

5 徳川家康に救われた石田三成 130

6 ついに石田三成が挙兵 133

第5章

復讐を果たす「天下分け目の決戦」

139

1 東軍が小山から引き返す 140

2 宇喜多秀家と小早川秀秋 142

3 黒田如水という曲者 148

4 いざ関ヶ原へ向かう 153

5 激しい戦闘が始まった 158

6 敗軍の将 162

7 乱世の生き方 165

8 藤堂高虎の積年の怨嗟 168

9 関ヶ原の「その後」 171

読む年表〔1590～1600〕 文禄・慶長の役から関ヶ原合戦までの全体がつかめる 177

戦国期の主な大名 文禄・慶長の役の動向と関ヶ原合戦時の兵力 194

おわりに 苦難にさらされた人たちはどう生きたのか 196

写真／康熙奉

図版／ジェオ

第1章

豊臣軍の怒濤の進撃はどこまで続いたのか

1 板挟みになった対馬

儒教的な価値観

1590年（天正18年）の日本列島と朝鮮半島。

国の成り立ちには、どのような違いがあったのか。

日本は長く続いた戦乱が終わり、豊臣秀吉が天下を統一した。それを可能にしたのが、武による力の統治だった。「下克上」という言葉が象徴するように、上下の秩序は崩壊し、力を持つ者が正義を主張できた。

その頂点に君臨したのが豊臣秀吉であつた。彼には、東アジアの秩序という概念はなかった。室町時代の前期には、日本と朝鮮王朝の間では使節の交換が行われ、対等な立場での善隣関係を築いていたのだが……。

1392年に建国された朝鮮王朝は、中国大陆の覇者たる明の意向に沿う形で朝鮮半島を統治し、200年にわたって太平の世を築いていた。

統治の根本思想は儒教。とりわけ、朱子学しゆぎという朱熹（1130～1200年）が体系化させた観念論的な儒教に基づく徳治主義が朝鮮王朝の国是となっていた。そして、国王を頂点とする中央集権体制が、国土の隅々まで儒教的な価値観を浸透させていた。

その一方で……。

豊臣秀吉は1585年に関白に就任した直後から、大陸に打って出る構想を持ち始めていた。彼は1587年に九州を平定したが、そのときには中国だけでなくインドまで手中に収めると大言壮語するようになっていた。

低い身分から1590年に天下人になった豊臣秀吉は、自身を「太陽の子」と称するに至った。日本の歴史上で、当時の豊臣秀吉ほど絶対的な権力を握った人物は他にいなかったかもしれない。それでも、彼は自分の強さと弱さを知っていた。

強さは、国内で自分に逆らえる者がいないこと。

弱さは、大名たちの従順さが知行の安堵で成り立っていること。

成り上がり者の豊臣秀吉には、徳川家康の家臣団のような譜代の忠臣者が少なかった。それゆえ、豊臣秀吉は長く大名たちを従わせるためには、褒美としての領土が不可欠だと痛感していた。しかし、国内にはもはや分け与える領土が残っていない。

それならば……。

すぐとなりの朝鮮半島に目をつけた、という次第ではないのか。

対馬の苦悩

漢文さえ読めない豊臣秀吉に、朝鮮王朝の朱子学に基づく徳治政治が理解できるはずもない。板挟みになったのが対馬である。

歴史的に餓死者を多く出してきたこの島は、かつては倭寇の根拠地になってしまった。その被害に困り果てた朝鮮王朝は、兵を送って対馬に攻め込んだことがあった。それは1419年のことで「応永の外寇」と呼ばれる。

以後、朝鮮王朝は対馬を懐柔する策に出て、農地を持たないこの島のために米を送ったり、日本との貿易の特権を与えたりしてきた。いわば、日朝貿易こそが対馬の命綱だった。しかし、1587年に九州を平定した豊臣秀吉は、無理難題を言ってきた。

「かの国から人質を取れ」

「国王を挨拶に来させよ」

対馬を仕切っていた宗義調そうよししげは、朝鮮王朝の国情をよく知っている。

中国大陆の明に対しては、崇め奉るがごとく儀礼を守る朝鮮王朝も、日本に対しては同格であるという意識に凝り固まっている。日本が少しでも格上であるという態度を示せば、火が出るような反感を持つのは自明の理だ。

2 来日した使節

朝鮮王朝に送った使者

豊臣秀吉の要求に宗義調は困り果てていた。しかし、天下人には逆らえない。対馬としては、「豊臣秀吉の怒りを買わず、朝鮮王朝が容認してくれる」という方法を考えなくてはならなかった。

それが、使節の派遣だった。朝鮮王朝国王の命を受けた使節が日本にやってきて、天下統一の祝賀が記された国書を豊臣秀吉に渡す……これが、考えうる最良の方法と思えた。

宗義調が使者として朝鮮王朝に送ったのが、柚谷康広という家臣だった。柚谷家は、朝

鮮王朝との通商に尽力してきた家柄である。

ただし、この人選は誤った。柚谷康広は朝鮮半島で傲慢な言動が多かったからである。彼は釜山から都の漢陽に向かう道中、儀仗の兵たちが持つ槍が短いことを嘲笑し、「お前たちの槍はなぜそんなに短いのだ」と言った。

戦国時代の戦場をくぐり抜けてきた柚谷康広から見れば、朝鮮王朝の槍はお飾りにすぎないと思えたようだ。

さらなる道中で、柚谷康広は地方の高官の接待を受けた。宴席では妓生キセンが場を華やかに彩っている。高官の白髪を見ながら、皮肉をこめて柚谷康広は言った。

「私は長い戦陣で苦労して髪も髭も白くなりました。あなたは妓生と遊びながら何の憂いもなく過ごされたようですが、それでも白髪なのはどのようなわけですか」

さぞかし、場が白けたことだろう。

柚谷康広は漢陽に到着したとき、外交も担当する大臣の礼曹判書イェジョパンソが歓迎の宴席を用意した。酔った柚谷康広は、わざと宴席に、当時はとても貴重だった胡椒をばらまいた。すると、妓生と楽師が競って胡椒を拾い始めて、その場が大騒ぎになった。

その様子にあきれかえった柚谷康広は、宿に戻ってから通訳に言った。

「お前の国は滅びるよ。人心がたるみきつている」

柚谷康広は、使節としてふさわしくないほど傲慢な男だった。しかし、彼が見たのは、当時の朝鮮王朝のありのままの姿だ。

戦国時代が終わったばかりの日本から見れば、朝鮮王朝の人々はぬるま湯にとっぷりつかっていると思えたことだろう。

長く待たされた使節

柚谷康広は朝鮮王朝から好ましい返事をもらうことはできなかったが、新たに対馬島主となった宗義智よしとはその後何度も朝鮮王朝に使節の派遣を願い出た。彼だけでなく、貿易に携わる人たちも、日朝関係の悪化を防ぐために尽力した。

朝鮮王朝もようやく重い腰を上げた。使節の派遣は、日本の内情を知るうえでも効果的だった。その使節が京に到着したのは、1590年7月下旬である。

あいにく豊臣秀吉は不在だった。小田原を攻めるために遠征していたからだ。小田原の北条氏が豊臣秀吉に降伏したのは7月5日だったが、彼はすぐに京に戻らず、そのまま諸大名に睨みをきかせた。従わない者がもはや天下にいないことを確認したうえで、豊臣秀

吉はようやく9月になって京に戻ってきた。

朝鮮王朝から派遣された使節の正使は黄允吉で、副使は金誠一キムソンイルだった。

「あまりに待たされたが、ようやく豊臣秀吉に会える」

黄允吉は胸をなでおろしたが、それは甘かった。豊臣秀吉はまだ朝鮮王朝の使節に会う気がなく、相手をじらし続けた。よほど下に見ていたのだろう。

豊臣秀吉がようやく使節と会見したのは11月7日だった。場所は聚楽第。贅を尽くした建物は完成して間がなかった。使節が見た豊臣秀吉は、小柄で顔色が黒く、人を射るような眼光だった。

黄允吉は豊臣秀吉に国書を渡した。

「統一を祝賀いたします」

そう書かれた国書を受け取った豊臣秀吉は、相手を見下した表情を変えなかった。そればかりではない。朝鮮王朝の使節をまるで無視するかのように、彼は我が子の鶴松を抱き続けていた。

鶴松は、淀殿のふくみが産んだ豊臣秀吉の長男で、このとき2歳だった。まだ言葉も満足に話せない。そんな幼子が豊臣秀吉に抱かれている間に小便を漏らした。溺愛していると、服が

小便で濡れても可愛いのか、豊臣秀吉は笑いながら侍者を呼びつけて、鶴松を渡した。

その姿を、黄允吉と金誠一は苦々しく見ていた。

「豊臣秀吉は傍若無人」

この一言が、朝鮮王朝側の使節が抱いた印象だ。

3 待ち続けた返書

軽んじられた人命

冷遇は接待の中身にもよく出ていた。料理は、外国からの賓客をもてなすものとは言えなかった。極めつけは、国書を出さなかったことだ。使節が帰国の段になっても、豊臣秀吉から返書が来なかった。

副使の金誠一は憤慨した。

「我々は王命で使臣となっている。返書がなければ、王命が捨てられたも同然である」

金誠一の立場なら、怒りはもつともだ。

儒教的な価値観が統治の根本になっている朝鮮王朝では、先例どおりの儀礼を守ることが不可欠になっている。ましてや、外国に使節として派遣されるほどの高官であれば、外交儀礼に忠実でなければ国に戻れない。金誠一が執拗に返書にこだわったのは、自らの立場をわきまえれば当然であつた。

金誠一がいかに使節として自尊心の強い男であつたか。それを物語るのが、京に向かう途上の対馬にいたときの話だ。対馬の島主であつた宗義智が使節一行を寺で饗応した。このとき、黄允吉と金誠一も先に座についていたが、あとから宗義智が現れたとき、彼はかごに乗ったまま門をくぐり、使節たちのすぐそばでかごを降りた。

これを咎めたのが金誠一だつた。

「対馬は我が国の藩臣ではないか。我々が王命を賜つて参つたというのに、このように侮辱するとはなにごとか。こんな宴席など受けるわけにはいかない」

金誠一はそう憤つて、座を去つてしまった。あわてたのが宗義智である。この男がやることも極端だ。宗義智はかごをかついでいた人を殺し、その首を金誠一の前に差し出して謝罪した。

この一件をもって、対馬の立場もわかる。対馬では餓死しないためには、朝鮮半島との交易で利益をあげなければならなかった。その権利を守るためには、朝鮮王朝側に卑屈にならざるをえない。

とはいえ、何の罪もない人を殺すとは……。これで、金誠一は機嫌を直したのか。儒教的な格式を守るために、あまりに人命が軽んじられてしまった。

疑心暗鬼になった使節

豊臣秀吉からの返書にこだわる金誠一。しかし、正使の黄允吉は別の切迫した事情を抱えていた。彼は、抑留されることを恐れたのだ。

「豊臣秀吉は正気ではない。我が国に攻め込むつもりであろう。そうであるならば、我々はつかまって殺されるかもしれない」

使節の正使がここまで疑心暗鬼になっている。返書を受け取らずとも一刻も早く帰国したいという強迫観念が黄允吉をあせらせた。

とりあえず、使節一行は帰国の途に着き、堺まで来た。そこに、豊臣秀吉からの返書が届いた。文面を読んだ黄允吉は愕然とした。

金誠一は怒りで声を震わせた。

「ただちに明国に乗りこみたい。貴国は先鋒を務めよ」

このように受け取れる文面だった。金誠一は執拗に返書の書き換えを要求した。

黄允吉は別の考えを持っていた。

「これほど礼儀に反した返書はないが、むしろそのまま持ちかえったほうが、豊臣秀吉のことを国の人々に知らせることができるのでは……」

黄允吉にとっては、もはや儒教的な外交儀礼は重要ではなかった。じかに見た豊臣秀吉の敵意をありのままに国王や政権幹部に伝える必要があった。

実際、黄允吉は1591年1月に釜山に戻ると、早馬を送って「秀吉が攻めてくる」ことを漢陽に知らせた。

『朝鮮王朝実録』1591年3月1日の記述によると、実際に使節が帰国報告をしたとき、14代王・宣祖は単刀直入に尋ねてきた。

「倭は攻めてくるや否や」

返答の中身は、使節の間で分かれた。黄允吉は自信を込めて上奏した。

「乱が起きましょう。備えが必要です」

御前會議の場に緊張が走った。宣祖の表情も険しい。

4 対立した正使と副使

朝鮮王朝の病巣

黄允吉の次に上奏した金誠一。彼はなんと言ったのか。

「かの国が乱を起こす気配はありません」

きつぱりとそう言った。さらに、金誠一は続けた。

「正使があのように申されて、人心を惑わすのはよくありません」

金誠一は、立場が上に当たる黄允吉を厳しく批判した。

真っ向から意見が対立した正使と副使。立場から言えば、格上の正使の意見が通るのが道理だ。しかし、その場で奇妙なことが起こった。なんと、副使である金誠一の意見が正式に採用されたのだ。

つまり、豊臣秀吉は攻めてこない、と……。

なぜ逆転現象が起きたのか。

当時、朝鮮王朝の政権内は東人派と西人派という二大派閥に分裂し、激しく対立していた。ただし、優勢なのは金誠一が所属していた東人派のほうだった。一方の黄允吉は西人派。派閥の力学で、金誠一の意見が勝ったのだ。

党争（政権内部の派閥闘争）は、朝鮮王朝の病巣と言われたが、こんな重大な場面でも弊害が現れたのである。

「豊臣秀吉は攻めてこない」という副使の意見が採用されたために、国防の強化は見送られた。ことなかれ主義の最たるものかもしれない。

確かに、「攻めてこない」と思っているほうが心おだやかにいられる。当時の朝鮮王朝は外敵に対して迂闊^{うかつ}すぎた。ずっと太平の世が続いていて、国を守るべき高官たちも緩みきっていた。ここが、乱世が続いた日本との決定的な違いだった。

徳川家康の事情

2つの死が豊臣秀吉の心を惑わせた。

1つ目は、もともと信頼していた弟の豊臣秀長の死だった。それは、1591年1月22日のこと。もともと豊臣秀長は朝鮮半島に兵を送ることに反対だった。彼が生きていれば、豊臣秀吉を翻意させることが可能だったかもしれないのだが……。

2つ目は、1591年8月5日の鶴松の死だった。わずか3歳。豊臣秀吉の悲しみはあまりにも深かった。鶴松を失ったからには、自分の後を託せる人物を早急に決めなければならなかった。

選ばれたのは、甥の豊臣秀次だった。豊臣秀吉は彼を後継者に決めて養子にした。豊臣秀次はもともと従三位権中納言の官位だったが、わずか1カ月で関白に昇進。豊臣秀吉自身は太閤と呼ばれるようになった。これは「前関白」の称号である。豊臣秀次が関白になったといっても、絶大な実権を握っていたのは豊臣秀吉だ。彼は鶴松の死の衝撃から立ち直る契機を欲していた。

あまりに悲惨な戦乱も、こんなにもごく個人的な事情から歯止めがまったくかからなくなっていた。そんな豊臣秀吉だったが、ただ1人、この男の意向を無視するわけにはいかなかった。

徳川家康である。

豊臣政権の五大老の筆頭。というより、豊臣秀吉にとって唯一、自分が取った天下をひっくり返す恐れを持った男だった。もちろん、徳川家康の面従腹背に気づかない豊臣秀吉ではなかっただろう。

1591年3月9日、豊臣秀吉は重臣たちを集めて、大陸侵攻の是非を問うた。

徳川家康は反対しなかった。他の大名と同じ立場を取ったのだ。それもそのはず、彼は豊臣秀吉から「賛成してくれば、貴殿には負担は掛けないようにする」という内々の言葉をもらっていたのである。

徳川家康は、ほくそ笑んだに違いない。朝鮮半島に送られる豊臣恩顧の大名は疲弊し、政権は弱体化する。そこに、徳川家康が付け入る隙が生まれる。

磐石の豊臣政権。ほころびが出るとすれば、それは大陸侵攻がもたらす混乱から始まる。天下人になることをあきらめていない徳川家康が、反対するわけがない。

「自分の兵は1人といえども海を渡らせない」

それが徳川家康の次なる戦略だった。

5 豊臣軍の戦術

20日で都を占領

もはや後戻りできない。

豊臣秀吉の頭に宿った妄想は、矢継ぎ早に現実化していった。

出兵の根拠地になったのは九州北端の東松浦半島だった。朝鮮半島に一番近いことは確かだが、地の利は決しているとはいえなかった。場所が不便すぎるのだ。しかし、東松浦半島の突端に名護屋城なごやを造ることが決まり、工事は1591年10月10日に始まった。

凄まじい突貫工事であった。加藤清正、黒田長政、小西行長らが中心になって築城を進め、1592年2月、城郭が周囲6キロの名護屋城が一応の完成をみた。

130もの諸将の陣営が城を囲み、城下の港には500艘の軍船が集結した。送られる兵は15万人。1年前まで何もなかった場所に、巨大な前線基地が出現した。

「本当に海を越えるのか」

兵の誰もがまだ半信半疑だった。大名も同様だ。ただ1人、豊臣秀吉だけが、正気を失ったまま、不退転の号令を発した。

こうして始まった文禄の役。豊臣軍は釜山に上陸してから怒濤の勢いで勝ち進み、わずか20日で都の漢陽を占領した。

序盤での大勝に気を良くした豊臣秀吉。自ら朝鮮半島に渡る意欲を見せたのだが、徳川家康や前田利家といった大老たちの反対によってしばらく延期した。その豊臣秀吉に代わって石田三成たちが朝鮮半島に渡り、奉行として実質的に各大名に命令を出した。

配下となった大名たちは兵糧米をしつかり確保するために、土地を占領して農民を支配することを狙った。

捕虜となった王子

第1軍の小西行長は、平壤に向かった宣祖を追って、北上を続けた。行く手を阻むのは、統制が乱れた朝鮮王朝軍というより、大河の数々だった。急流の川が多い日本の地形と比べて、朝鮮半島には川幅が広い大河が多かった。臨津江イムジンガンもその1つ。小西行長軍はここも果敢に突破して平壤をめざした。

第2軍の加藤清正軍は、朝鮮半島東北部の咸鏡道ハムギョンドに向かった。ここは辺境の地。北方の異民族の侵入も多い。その地にまで兵を繰り出すことで、豊臣秀吉の目的が朝鮮半島全土の占領であることが明白になった。

咸鏡道をさらに進んだ加藤清正。「賊将の中で一番勇敢で、戦闘に長けていた」と朝鮮王朝で評された彼は、北辺の要地であった会寧フエニョンにいた王子2人を捕虜にした。

その2人とは、宣祖の息子である臨海君イメグンと順和君スヌアグンである。

なぜ、王子までが辺境の地にいたのか。実は、2人は義兵を募る目的を持って地方を巡回していたのである。そこまで朝鮮王朝は追い詰められていた。

なお、臨海君と順和君は、宣祖の側室が産んだ王子たちであった。

一夫一婦制の朝鮮王朝では国王といえども妻は1人だけだったが、側室はかなり多かった。宣祖の場合、正室の懿仁王后ウィインには子供がいなかったが、7人の側室が13人の王子と10人の王女を産んでいた（1592年当時）。その中で、宣祖の長男が臨海君であり、彼は正統的な王位継承者になれる王子だった。

しかし、戦乱が臨海君の立場を極端に悪くした。彼は加藤清正軍の捕虜になったことで屈辱にまみれ、解放された後には精神的に乱れ、酒に溺れて奇行が目立つようになってし

まった。もともと能力的にも周囲からの評価が低かった。

代わりに、王位継承者として信頼を獲得していったのが、二男の光海君^{クワンヘグン}だった。彼は頭脳明晰で、戦乱の最中にも戦功を挙げている。

そうした高い評価が積み重なっていき、二男でありながら光海君が世子^{セジャ}（国王の正式な後継者）に選ばれている。このように、豊臣軍との戦争は、朝鮮王朝の王位継承問題にも大きな影響を及ぼしたのだ。

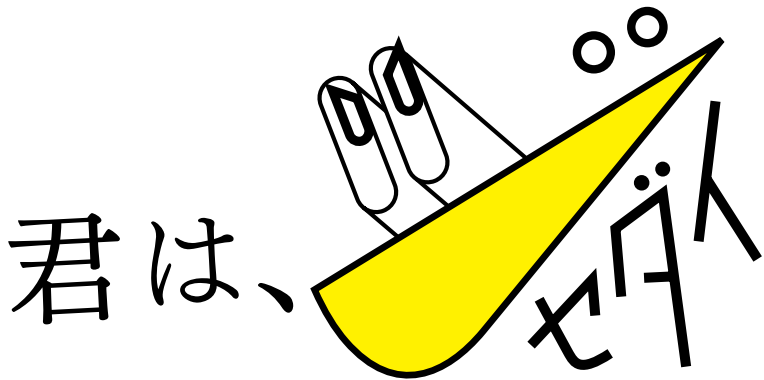
後の話であるが、1608年に宣祖が世を去って光海君が15代王として即位したとき、彼は翌年兄の臨海君の命を奪っている。不満が多い臨海君の政府批判が直接的な理由。とはいえ、王位継承をめぐる王子同士の骨肉の争いは朝鮮王朝でも前例があり、常に悲劇が繰り返される危険性を朝廷が抱えていた。

小西行長軍と加藤清正軍の進路

—— 小西行長軍

----- 加藤清正軍





何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!